

を搾取する。資産の無い人間は労働力を売り賃金を得た後、必要消費バスケットを購入するが、その時必要労働時間より多くの労働力を供給しなければならないという意味で搾取される。要するに、資産額の多寡で労働需給のパターンが決まる、すなわち搾取・被搾取の状態、階級が決定される、という原理である。第3章では、労働市場の代わりに資本市場が導入され、それが労働市場と全く同様な階級構造・搾取の状態をもたらすことが証明される。以上が第I部となっている。

第II部では拡大再生産モデルが検討されるのであるが、まず第4章では階級と搾取の対応原理が、第2章程シャープではないが、蓄積モデルでも成立することが示される。その際、搾取の定義において、生存限界の消費バスケットとか、諸個人の消費選好とかが一切不要であることが強調される。第5章では、それまでのレオンチェフ・モデルより一般的な線型モデルでの搾取について考察する。そして、階級と搾取の対応原理を生き残らすために、森嶋による労働価値の定義を捨て、新たに均衡価格に依存する労働価値を提唱する。第6章では異質労働の問題を、各個人の労働力賦与量が異なるモデルに変形して取り扱い、マルクス流の労働価値に基づく搾取理論が維持できないことを主張する。以上、第4章から第6章までが第II部の要素である。

第III部の最初第7章において、ゲームの理論に基づく搾取の新しい定義を提出する。ある結託(coalition)が搾取されているのは、その結託がある規則に従って独立分離した時、その特性関数の値が、現在社会から受けている分配の結託内総和より大きく、且つ、その補集合による結託について逆のことが成立する場合である。かくして、搾取の型の分類は独立分離する際の規則を特定化することによって行われる。封建的搾取に対応するのは、人々が現有している、あるいは使用している土地・資産をひきさげて独立分離するという規則であり、資本主義的搾取に対応する規則は、結託内の各個人が社会の平均資産量を持って独立するというものである。そして、社会主義的搾取は所有疎外の不可能な資産(例えば専門的技能)までも、結託内の各個人が社会的平均量を持ち出すという規則に依拠して定義される。第8章では現在の社会主義諸国における搾取をもう少し詳しく検討している。官僚機構のトップ付近でいることに伴う地位による搾取とか、またそういう搾取が社会的に必要なかどうかという議論である。社会的に必要な搾取というのは、もしそれが欠けたならば社会全体の厚生水準が大幅に下落し、搾取の不存在そのものが望ましくない類として、同義語反

J. E. レーマー

『搾取と階級の一般理論』

John E. Roemer, *A General Theory of Exploitation and Class*, Cambridge, Harvard University Press, 1982, xiii+298 pp.

本書を構成する一連の研究を開始した動機は、何故社会主義国間にも戦争があるのか、社会主義国にも搾取があるのか、の疑問を解明することであった、と序論に書かれている。そして、封建制、資本主義、社会主義それぞれにおける搾取を一般的に再定義し、各体制における社会的に不必要な搾取の除去こそ、階級闘争の目的であるし、それが社会の発展であるとする。また、このような論理的展開こそ史的唯物論の応用にほかならないと主張する。こう紹介すると罪無き説得の書に聞こえるが、その実多くの問題点を含んでいると思われる。批判の前に本書の章構成を概述しておく。

第1章では、前資本主義での単純再生産モデルにおける搾取を定義・考察する。ここでは、労働市場・資本市場が一切存在しなくても、財市場すなわち交換の場に基づく搾取がありうる、という異端命題が主張される。第2章では労働市場を付加して、個人の労働需給の状態に従って、「国民」を5個の階級に分類する。労働需給は、与えられた均衡価格の下における各個人の最適化行動(線型計画法)によって決定される。そして、階級と搾取の対応原理なるものを打ち出す。すなわち、資産の多い個人は自ら働かず他人の労働を購入し生産を行い、必要労働時間より少ない時間しか働かないという意味で他人

復的に説明されている。第9章では以上の議論を史的唯物論との関連の中で、哲学的、倫理的、政治学的コメントが述べられている。経済学に関する5節「何故労働価値に基づく搾取理論か？」では、資本主義についてのマルクスの単純なモデルでは労働価値に好意的でありうるが、それを越える一般的モデルでは労働価値を捨て去るよう勧めている。以上で最終第Ⅲ部を締めくくっている。

読んでいる途中で気付く大きな問題点は、完全情報の合理的個人と常なる均衡の存在という2点である。これから派生する最初の欠陥は、著者のいう封建的搾取が非常に限定されたものになるということである。かくして、新古典派の搾取は封建的搾取である、という命題は驚くべきものでなくなる。完全情報や一物一価は資本主義に先行する経済社会では余りに非現実的である。搾取の本質を引き出すための作業仮説だというのは弁護にならない。それは搾取の概念をひどくゆがめるものと考えられるからである。要するに第Ⅰ部は第Ⅱ部に対して数学的に先行しているのであり、決して前資本主義のモデル分析ではない。もっともこのことは目くじらを立てずともよいという読者が多いかも知れない。

致命的なのは、第Ⅰ部、第Ⅱ部において搾取の定義が個人の均衡下における労働力需給パターンに依存していることである。現実には失業あり過剰設備あり差別賃金ありで均衡とは程遠い。基本的マルクス定理が均衡でしか主張しえないのは骨抜きである。第5章で取り立てて、労働価値の市場依存を言わなくても、それは已に第Ⅰ部で要求されている。とにかく、著者が再三繰り返す「マルクスの搾取の定義を拡張した」というのは誤りである。マルクスの定義は、均衡状態、均衡価格から独立である(もっとも技術選択が価格に依存するという意味で、労働価値が市場に依存するというのは周知である)。また、マルクスは労働者個々の搾取よりも、労働者階級全体に対する搾取の方を重要視したであろう。とはいえ、階級と搾取の対応原理は興味がない訳ではない。非均衡状態の分析を始める人の良いスタート点になる。

異質労働を取り扱う際にも、各種の労働賃金率の使用を提唱している。第6章に見られるこのような議論は、少なからぬ人の賛成を勝ち得ると思われるが、まだそこに逃げ込む必要はない。もう少し、異質労働の概念そのものを労働者階級全体の観点から吟味し直すのがよい。これを怠るとすぐ労働者階級内部での搾取関係に出会うことになる。

第Ⅲ部でのゲーム理論による搾取の定義は、ゲーム理論の一般的欠陥を如実に示している。結局それは普通の

言葉による議論を、結託とか特性関数とか規則とかの術語を使って混ぜ直しただけである。数学志向の人にはエレガントかも知れないが、経済学徒がこれらのゲーム論的言い換えから有意義な命題を直接導くことはできない。彼は経済学的具体化の道を逆行した後、ゲーム理論はナンセンスではないが、さして有用でもないと感じるであろう。

上に述べたように、封建時代における搾取は簡単な数理経済モデルでは取り扱えない(もっともそれは経済社会史としてはおもしろい話題に富んでいるであろう)。マルクスも、抽象的人間労働という概念すら想定できない封建制の中で、労働価値に基づく搾取理論を言う訳がない。それでは、資本主義と社会主義とでは如何にとなれば、充分マルクスの流儀でやっていけるであろう。しかも不(非)均衡の状態で搾取が定義され、利潤(剰余)との関係が議論できる。確かに異質労働の取り扱いについては若干の吟味があることは先にも述べた通りである。社会主義における搾取については、森嶋・カテフォリス著『価値・搾取・成長』(高須賀・池尾訳、創文社、1978年)の第3章における方法を見ればわかるように、マルクスの流儀の拡張で間に合う。また、これで重要な論点はほとんど扱いうる訳である。無論、森嶋・カテフォリスの定義は、ゲーム理論のジャーゴンの洪水の中に浸すことはできる。すなわち、レーマーの定義(第7章)の特別な場合である。しかし、ただそれだけのことである。

本書のカバーに載せられた、どぎつい賛辞に比べるとこの書評はいかにも冷淡にうつる。しかし、本書のテーマは大へんおもしろいものだし、同時に困難なものである。この書評で言いたかったことは、階級や搾取の問題に挑戦していくのに、本書はそれ程(少なくとも、カバーの上の短評中で約束したり予言されたりしている程)深くはないし、パス・ブレイキングでもない、ということである。一部の人が本書に熱中できることを否定しないし、議論の一個一個がある意味で「誠実」なことも事実である。しかし、何か刺激的でないのである。

本書の出発点であった中国とヴェトナムという社会主義国間の戦争問題に立ち返ってみれば、それは閉じた一国民経済モデルでは、いかなるモデルであれ取り扱うことができないものである。社会主義国の経済運動法則と歴史的傾向を、史的唯物論を適用して分析するにしても、一国モデルでは限界が明白すぎる。資本主義の分析以上に多国モデルが必要とされており、そういう状況で階級と搾取の新しい把握法が求められていると思われる。

〔藤本喬雄〕